

二者間バイアス区間における3人目の振る舞い Behaviors of the third participant between other two-parties bias in turn-taking

宮崎 太我[†], 榎本 美香[‡]
Taiga Miyazaki, Mika Enomoto

[†]東京工科大学, [‡]東京工科大学
Tokyo University of Technology, Tokyo University of Technology
g3120028fa@edu.teu.ac.jp

概要

本研究では、3人会話において2人だけが話している所へ、3人目が参加する方略を解明する。分析1では、3人目が会話に再び参加した時の発話内容を分類する。分析2では、相槌・頷きの生じる位置を分析し、3人目は発話内・発話末の使い分けがないのに対し、他の2人では発話内で頷き、発話末で相槌という使い分けをしていることをみる。分析3では、事例分析から、共有知識や連続質問などによって3人目が会話から取り残されていることをみる。

キーワード：3人会話、二者間バイアス、相槌、頷き、話者交替

1. はじめに

Sacksら(1974)が提唱している話者交替規則は、会話参加者の人数に関わらず誰もがターン(発話権)を取れるシステムになっている。ターンはターン構成単位とよばれる単位から構成され、その終端は母語話者の聞き手なら誰でも予測できる。そして、その単位が終わると話者交替にふさわしい場所である話者移行適格場(transition relevant place; TRP)となる。TRPまでに、話し手がある一人の聞き手に呼びかけるか視線を向けるかして(宛先をあてて)、質問や確認など隣接ペア第一部分となる発話をすれば、その聞き手が次話者に選択されたことになる。一方で、話し手が複数の聞き手に視線を向けたり呼びかけたりしていたり、逆に誰も見ていなかったり呼びかけていなかったりして、陳述や応答など隣接ペア第一部分ではない発話をすれば、聞き手のうちでTRPにおいて真っ先に話し出した者が次話者になる。この場合、どの聞き手も同様に次話者になる権利が与えられることになる。

しかし、Sacksらは次のようにも指摘する。会話参加者が3人以上の時、順番順序に偏りが生じる。「直前の話し手が次の話し手に」なりがちだという。これを高梨(2016)は「二者間バイアス」と呼んでいる。例えば、3人(A,B,C)の会話において順番にA→B→CやC→B→Aなど、3人が順番に話者交替を行うのは珍しい。往々にして、A→B→AやB→A→Bなどのように、直前の話

し手が次の話し手になりがちだというのである。この時、3人目(C)に話者交替の機会がなく、会話から取り残されてしまうことになる。

榎本・伝(2006)では、3人会話において同じ2人がやり取りを継続するケースが約4割(256発話交換のうち104回)あるとしている。こういった場合、3人目はいかにしてターンを取ることができるのだろうか。本研究では、多人数会話のうち3人話を対象とし、二者間バイアスにより会話から取り残された3人目(C)がどのような発話内容によって再び話者交替に参加するか明らかにする。

2. 方法

2.1 分析資料

千葉大学の学内にあるラウンジ施設で収録された、大学生・大学院生・ポスドクを含む友達同士の3人の日本人グループ12組分を分析資料とする。1組あたりの会話は約9分30秒であり、計約2時間となる。各セッションの開始前にサイコロを振って話題(「情けない話」「ビックリした話」「びびった話」「恋の話」「腹の立つ話」「当たり目(「臭い話」か「大事件」)»)を決めたが、参加者はその話題に固定されることなく、自由に話題を変えて良い旨が教示された。

2.2 二者間バイアスの抽出方法

会話に参加する参加者3人(A,B,C)中の2人(A,B)が2回以上発話交換した後、残る1人(C)が発話する箇所を抽出すると、94箇所あった。抽出例としては図1の様に、A,B,Cの3人会話で、Aさん「高校のときは文化部だったの?」、Bさん「ううん、運動部だったよ」、Aさん「何やってたの?」、Bさん「ハンドボールだよ」と、A,Bの会話のキャッチボールが2回以上あった上で、Cさん「僕も高校ハンドボールしてた」のような3人目(C)の発話を抽出する。また3人目以外の会話を行なっている2人(A,B)を他の2人とする。

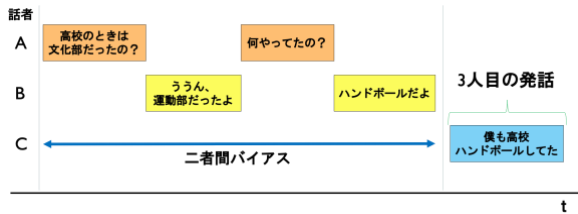


図 1 二者間バイアスの抽出方法

3. 分析 1 : 3 人目の発話の分類

3.1 目的

二者間バイアスにより会話から取り残された 3 人目が、どのような発話内容によって会話に再び参加しているのかを明らかにする。

3.2 方法

図 1 にて抽出した 94 箇所 の 3 人目の発話の内容に応じて分類を行う。

3.3 結果

分類の結果、表 1 のような 12 種の発話内容に分類することができた。12 種の発話内容の生起頻度は図 2 のようになった。この中でも使用されやすい上位 3 種の発話内容について以下に詳述する。

表 13 人目のターン取得発話の分類

名称	内容
詳細化	先行する発話に出てきた言葉を用いてより詳しい内容を聞き返す
別の切り口の導入	二者が話している内容とは異なる視点を提供する
宛先取得	話し手が視線によって第三者を次話者に選び、選ばれた第三者が発言する
知識依存	自身が持っているより詳しい知識を話す
独り言	低いトーンで視線を誰にも向けず、独り言を挟む
状態変化	語りの進行性を優先する発話
投擲	誰に向かってでもなく、自分の意見や感想を無責任に差し挟む
セカンドストーリー	二者が会話している内容に類似した体験談を語る
評価的発話	二者が会話している内容を評価する
修復	話の理解において生じたトラブルを修復する
要約	二者が話している内容を要約する
やじ	二者が話している内容にやじをいれる発話

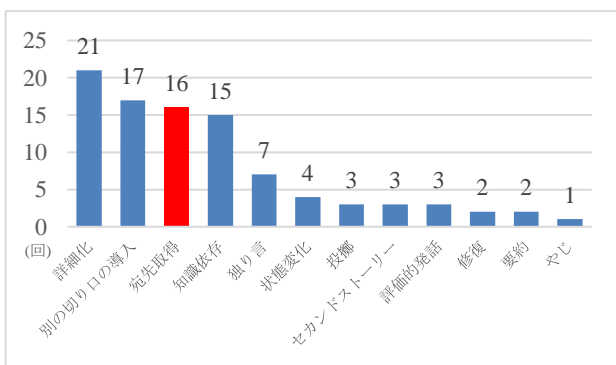


図 2 ターン取得発話の生起頻度

3.3.1 詳細化

先行する発話に出てきた言葉を用いるなどし、より詳しい内容を聞き返すものを「詳細化」とする。

事例 1 では、A と B が「ウィーン」について話している。また、日本人がカフェで「ウイナーコーヒー」をよく頼むなど会話を行なっているため A と B の二者間バイアスとなっている。01 では A が、ウイナーコーヒーは正規の名称ではないが日本人がよく言うと話している。08 では B も、「名前が違う」と同意の旨を示している。そこで C が「ウイナーコーヒーって(0.108)クリームがくるくるって乗ってるやつですか」(11)と、二者の会話で出てくる「ウイナーコーヒー」を用いてウイナーコーヒーについて詳しい確認を行なっている。

事例 1 : 0632[01:13.494~01:30.251]

- 01 A よっぱ[ど日本人はウイナーコーヒーって言うんでしょ[う[ね
- 02 B [<笑>
- 03 B [よ[ろしく
- 04 C [(L_ふうん)
- 05 A カフェコンバーナとかあの辺[がそう [なるかな
- 06 B [(L_うん) なん[か: そう
- 07 C [(L_ふうん:]
- 08 B [名前が違う
- 09 A (D_[ト)そ[う
- 10 C [(L_え)
- 11 C [ウイナーコーヒーって(0.108)クリームがくるくるって乗
ってるやつ[ですか
- 12 B [(L_うん)
- 13 A [(L_(W_アン)うん))(L_うん)(L_うん)
- 14 C [(L_あー:)
- 15 A でもあれはね(0.244)勝手に日本人が命名したんだよね

3.3.2 別の切り口の導入

二者で話している内容とは異なる視点の話題を提供するものを「別の切り口の導入」とする。

事例 2 では、B が A を合唱団に勧誘するため話している。そこで A が所属するサークルの縛りが厳しく入れないことについて話しているため、A と B の二者間バイアスとなっている。02 で A はサークルだが真面目に取り組む人が多いと話している。それらの会話を聞いた C は 11 で、「サークルってここどこに(T_センビ|線引き)(0.163)どこで線引きするか難しいよね」と、サークルと部活動の線引きについて会話の視点をうつしている。

事例 2 : 0332[02:07.662~02:23.626]

- 01 B でも:たしかにいないと(D_ん)迷惑が[かっちゃうよ[うな:[活動だよ
- 02 A [(L_うーん) [やっぱみ

んな(0.197)かなり真面目な:気持ちで取り組んでるらしく

03 C [(L_うん)

04 C [(L_ふ_うん)

04 B (L_へ[え:]

06 A [(L_あ)すいませ[んって

07 C [(L_ふん)

08 A <笑>

09 B そうなん[だ

10 C [<声>

(1400)

→11 C サークルってこうどこに(T_センピ-|線引き)(0.163)どこで線引きする

か難しいよ[ね

12 A [(L_うん)

13 B [(L_うーん)

3.3.3 宛先取得

二者間バイアスのうちどちらか片方が、視線によって第三者(3人目)を次話者を選び、選ばれた第三者(3人目)が発言することを「宛先取得」とする。

事例3では、アイワとソニーの会社についてAとBが話している。そのためAとBの二者間バイアスとなっている。Bが05の発話をした直後の「ね:」(06)と発話する際に、視線をCに向け確認を行なっている。Bからの宛先を受け取ったCは07にて発話を行なっている。

事例3 : 0232[05:02.196~05:11.902]

01 A アイワとソニー

02 B アイワ入るの

(622)

03 A 入らないよ

04 A つぶれちゃうじゃん

(813)

05 B アイワつぶれないでしょう

06 B ね:

(1190)

→07 C どうなんだろうね:

08 B どっかつぶれんの

3.4 考察

94箇所のうち「宛先取得」(17%)を除く発話内容(83%)が自ら率先してターンを取得していることがわかる。また、「宛先取得」は二者間バイアスの2人の片方が宛先に選んでくれたことで次話者として選択されている。そのため「宛先取得」は最も自然で話者交替規則に基づくものである。

4. 分析2 : 二者間バイアス中の相槌・頷き

4.1 目的

二者間バイアス中における聞き手の振る舞いである相槌と頷きについて、3人目(C)と他の2人(A,B)の打ち方に違いがあるのかを明らかにする。本研究では聞き手反応の相槌と頷きの出現位置をより詳しくするために、「発話内」と「発話末」に分けて分析を行う。

4.2 方法

3人目(C)の発話の前にある他の2人の2交換以上の発話対を相槌・頷きの抽出区間とする。例として図3では、3人目の発話が「おなかいっぱいだよ」であり、他の2人の発話交換が「たくさん焼くと消火がおそくなるんだって」「それどっちがいいんだろうね」「遅くならないほうがいいんじゃない」「遅くならないほうがいいの」と続いている。この他の2人の発話対を抽出区間とする。続いて発話内と発話末について説明する。助動詞や終助詞より前に相槌や頷きがくると、発話末とする。助動詞や終助詞より前に相槌や頷きがくると、発話内とする。また助動詞や終助詞と重複しても、発話末とみなされると、榎本(2009)で示している。例として、図3の「たくさん焼くと消火がおそくなるんだって」の「て」付近に出現したらターン末とし、「て」以前に出現したらターン内とする。

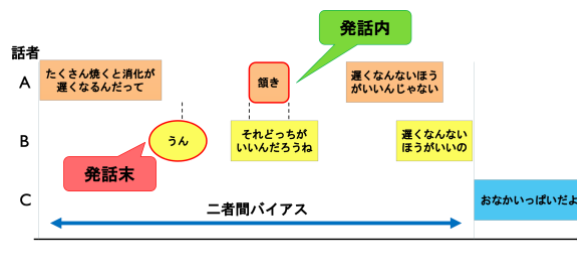


図3 相槌・頷きの抽出区間

本研究では聞き手の振る舞いとしての相槌・頷きに注目しているため、話し手による相槌や頷きは含まないものとする。

4.3.1 相槌の結果

二者間バイアス中における相槌についての分析結果は、3人目が図4、他の2人が図5のような結果となっている。そして図4より、3人目は発話内88回・発話末88回と同じ割合で相槌を使用しているため、発話内・発話末による使い分けがないことが分かる。一方で、図5より、他の2人(2人の合計)は発話内176回・発話末240回と発話末での使用回数が多いことから、発話末で多く相槌を打つよう使い分けしていることが

分かる。

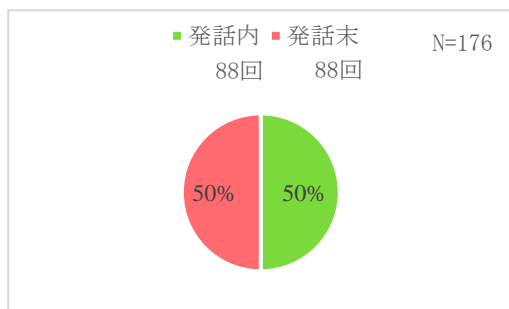


図 4 3人目の相槌の打つ位置

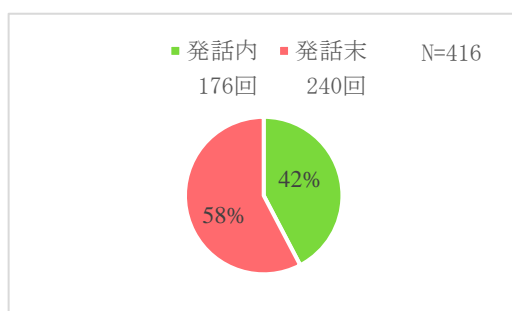


図 5 他の2人の相槌の打つ位置

4.3.2 頷きの結果

二者間バイアス中における頷きについての分析結果は、3人目が図6、他の2人が図7のような結果となっている。そして図6より、3人目は発話内73回・発話末55回と発話内でやや多く使用していることが分かる。一方で図7より、他の2人(2人の合計)は発話内312回・発話末134回と3人目よりも多い割合で発話内での使用回数が多いことから、発話内で多く頷くよう使い分けしていることが分かる。

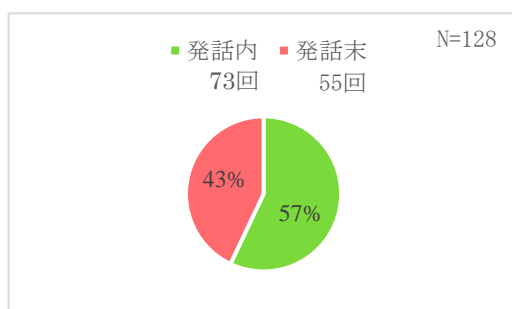


図 6 3人目の頷く位置

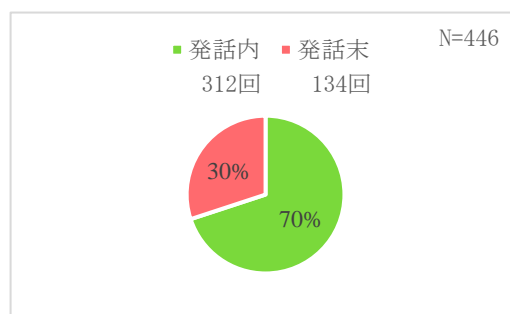


図 7 他の2人の頷く位置

4.4 考察

二者間バイアスによって取り残されている3人目の相槌は、発話内・発話末の使い分けがないことがわかる。しかし他の2人では発話末で相槌、発話内で頷きという使い分けがなされている。他の2人のうちの聞き手は発話末で話者交替することが期待されるため、ターンを取らないときには明示的に相槌によってそれを示す必要があるからだと考えられる。

5. 分析3：二者間バイアス区間の事例分析

5.1 目的

分析3では二者間バイアス区間で、なぜ3人目が話せないのかの事例分析を行う。

5.2 方法

二者間バイアス区間を対象とし、会話の構造を詳細に分析する。

5.3 結果

「共有知識」、「連続質問」、「隣接ペア第一部分-挿入連鎖-応答-隣接ペア第二部分」の3つの構造が顕著であった。以下に詳述する。

5.3.1 共有知識

01~44はAとBが昨日の夜課題をやっている、それを無事提出できたという話が続いている。この共有知識をもたないCは会話に参加することができていない。44でAとBの共有知識に関する話題は終了したと見えたが、46でBが再び「どこでやったの」とこの話題の続きを話し始めたため、Cはまた参加できない。しかし、51で再び話題が終了し、52,53でCが「(I-え)今週だれだったの」というその話題を掘り下げる質問という形で会話に参加している。

事例4：0332[04:36.570~05:14.316]

01 A わたしもきのう寝てた

02 A ごめん<笑>

03 B ごめん

- 04 B で[ごめんき[のうメール<笑>
 05 A [<笑> [(L_うん)
 06 C [<笑>
 07 A いや
 08 A [(F_あのね)(0.138)送った直前まで寝て[た あ[たし[がも<笑>
 09 B [ごめん [<笑>
 10 C [<笑>
 11 A (L_は)やんな[きやって<笑>
 12 B [<笑>
 13 B <笑>
 14 B なんか予知した:
 (925)
 15 A <笑>
 16 B (L_ふう)(D_ア)
 17 A (L_はあ)
 (1000)
 18 B やば[かった
 19 C [(L_うん)
 20 B メール三件も来てた
 21 A ほん[とう?<笑>
 22 B [<笑>
 23 C [<笑>
 24 A 忙しいじゃん<笑>
 (1617)
 25 B でもちゃ[んと:ちゃんと出したよ
 26 C [<声>
 27 A わたしも出[したよ:
 28 B [(L_うん)
 29 B わりと余裕持って終われ(0.197)[た
 30 A [ほんとう?
 31 A あたし[:ぎ [りぎりだ[った
 32 B [(L_うん)
 33 C [(D_ン) [(D_ア)
 34 B そ[う
 35 A [+分(,)]前:だよ
 36 C [<声> [(D_ア)
 37 A ここに来る<笑>
 38 B (L_あっ)
 39 B 出[したのはわ[たしも今出してきたん[:だけど:
 40 C [<笑>
 41 A [(L_うん) [(L_(W_アーン)うん))
 42 A いや終わったの
 43 B 終わった[た[の
 44 A [<笑>

- 45 C [(L_ふん)
 46 B どこでやってたの
 47 B <笑>
 48 A 五階で(0.276)[実験 [室でやっ[てた
 49 C [(L_あー) [(L_ふん)
 50 B [(L_あー)
 51 A ずっと
 →52 C (L_え)
 →53 C 今週だれだったの
 54 A (W_コシ[今週)(R_山形)さん]
 55 C (L_うん)
 56 B (L_うん) そうそう
- ### 5.3.2 連続質問
- これは高梨(2002)が、質問者と応答者という参与役割が一定期間継続する現象として指摘しているものである。応答者は明示的にアドレスをしているわけでは無いが、質問者が次の質問をするという発話権を取りやすい状態にある。その結果として、質問者と応答者の2者間バイアスが発生する。
- 事例5では質問者がB、応答者がAとなり、この参与役割が2回ほど継続されている。会話から取り残されているCは、連続質問の継続期間中は相槌や頷きを打てていないことがわかる。そして、08のグルテンが何が正解かわからないと応答者Aが「麩麩グルテングルテングルテンドっから」と発話することで、正解を知っていたCが10で「(T_コー|小麦)」と発話しだす。ところが、AとBの発話に重複してしまったので、12でCはそれをもう一度やり直し、「グルテン小麦粉:です[ね]とようやくターンをとっている。
- 事例5 : 0732[07:07.072~07:18.503]
- 01 B 麩てお麩のこと?
 02 B (D_ア)だよ[ね
 03 A [そう麩麩麩
 04 B あれおすましに(D_ヌヌ)(0.385)浮かべるやつだよ
 05 A だけど生麩とかおいしいよ
 06 B あれ何で出来てん
 07 B 大豆
 08 A [麩麩グルテングルテングル[テンどっか[ら<声> (L_うん)
 09 B [(L_あ) [グルテンか
 10 C [(T_コー|小麦)
 11 B [じゃ
 →12 C [グルテン小麦[粉:です[ね [:
 13 B [小麦だ
 14 A [小麦[粉

15 B (D_ト)

5.3.3 挿入連鎖

事例6ではゼミの発表について話している。はじめに01,02でBが何分くらい発表だったのかAに質問している。しかしAは何の発表のことかわからなかったため、03で挿入連鎖としてBに聞いている。それに対し、04でBはゼミの発表のことだと発話している。05でBの質問の意図を理解したAは最初の01,02のBの質問に回答している。しかしAは04Bの発話から0.755sの間をあげ、さらに応答の際に、「ゼミ:(0.897)きょう二十分くらいかな」(05)と0.897sの間を空けている。そこで同じゼミを受けていて内容を知っているCが、この0.879sの間の0.158s経過後にAに代わって、06で「きょう長かったね」と発話を行うことができる。

事例6 : 0232[02:30.349~02:39.770]

01 B きょうの発表はどうだったの

02 B 何分くらい発表[したの

03 A [発表って何が

04 B ゼミ

(755)

05 A ゼミ:(0.158)[(0.739)きょう二十分くらいかな

-06 C [きょう長かったね:

(992)

07 B (W_ショリ一人)で?

08 A (L_うん)

5.3 考察

複数の二者間バイアス事例を分析した結果、「共有知識」、「連続質問」、「挿入連鎖」の3つの構造が明確となった。「共有知識」に基づいて話している2人がその話をし続けている間は3人目は入ることができない。また、「挿入連鎖」や「連続質問」において、次の話者が特定されている時には3人目は入ることができない。

「共有知識」の話が終結して3人目は話者交替に参加できるようになる。「挿入連鎖」「連続質問」において、答えるべき人が応答に詰まると3人目は代わりに答えることでターンをとることができる。

6. 考察

本研究では二者間バイアスを分析することで、会話から取り残された3人目が、再び会話に参加する方法を、相互行為分析により明らかにした。

3人目の発話の分類では、12種に分類することがで

きた。12種のうち「宛先取得(17%)」を除く11種(83%)が自ら率先して特殊なやり方でターンを取得していることが明らかとなった。しかし、「宛先取得」には「話し手からの宛先+11種(宛先取得を除く)の発話内容」となっている事例も存在していたため、今後の課題として「宛先取得」内の詳しい分析も行う。

二者間バイアス中の相槌・頷きでは、二者間バイアスにおける他の2人は、相槌・頷きの使用位置に使分けがあることが明らかとなった。これに対し3人目は、使用位置による大きな使い分けは見られなかった。また、3人目は他の2人に比べ発話末に相槌を打つことから、3人目であることを示し、自らバイアスに割って入らないということを示しているとも考察できる。

二者間バイアスの事例分析では、現段階においてバイアス区間内に3種類の構造があることが明らかとなった。「共有知識」から取り残された3人目はその話が終わるまで参加できない。「挿入連鎖」「連続質問」など連鎖構造上、宛先が特定される場合も宛先にならない3人目は参加できないということが明らかになった。しかし、今回の分析では複数の事例しか分析できていないため、今後の課題として残りの事例も分析を行う。

文献

- [1] Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974) "A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*", 50(4), 696-735.
- [2] 高梨克也, (2016) "基礎から分かる会話コミュニケーションの分析法", ナカニシヤ出版.
- [3] 榎本美香・伝康晴, (2006) "3人会話における発話交換構成員の推移の分析", 社会言語科学学会大17回大会論文集, pp.12-15.
- [4] 榎本美香, (2009) "日本語における聞き手の話者移行適格場の認知メカニズム", ひつじ研究叢書 言語編.
- [5] 高梨克也, (2002) "会話連鎖の組織過程における聞き手デザインの機能", 社会言語科学会第10回研究大会予稿集, pp.191-196.